



Title	不適応的な自己愛と対人関係の関連
Author(s)	中村, 晃
Citation	大阪大学大学院人間科学研究科紀要. 2005, 31, p. 197-218
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8662
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

不適応的な自己愛と対人関係の関連

中 村 晃

目 次

1. 問題と目的
2. 文章完成法による NPI の下位尺度における特徴の検討 (研究 1)
3. 自己愛と社会的スキル、孤独感との関連 (研究 2)
4. 自己愛と対人恐怖心性との関連 (研究 3)
5. 総合的考察

不適応的な自己愛と対人関係の関連¹⁾

中村 晃

1. 問題と目的

「自己愛」とは自分を愛することであるが、自分自身を大切に思うような健全・適応的な側面と、いわゆるナルシストに見られるように、自己顕示的で他者への配慮が欠けるような不健全・不適応的な側面の両方を「自己愛」には含んでいるため、これまでの自己愛の議論は混乱が大きかったと考えられる。これまでの「自己愛」の定義には、「自己に対する関心の集中」(Moore & Fine, 1967)、「自己(自己表象)に対するリビドーの備給」(Freud, 1914; Hartmann, 1964)、「まとまりと安定を保った、肯定的感情を持てるような自己表象を維持する機能」(Stolorow, 1975)、「外の世界では通用しないほど自己イメージが拡大すること」(Millon, 1981)などがある。しかし、以上に挙げただけでも「自己愛」が包括する意味があまりに広く、何を意味するのかがあいまいになるという問題があった。

そこで自己愛の概念を整理していくと、自己愛のうち、自分自身に対する基本的な肯定感や関心を適応的(健康的)な自己愛とすると、他者が持つ自分に関する評価への関心の集中やこだわりが、不適応的(不健康的)な自己愛と考えることができることが示唆された(中村、2004)。これまで、健康な自己愛と不健康的な自己愛の関係は、全く質的に異なるという考え方と、連続線上にあるという考え方、あるいは健康な自己愛が育たなかったために不健康な自己愛が発達してくるという考え方があり、議論が分かれている。もし、不健康な自己愛を健全な自己愛が欠乏していることに対する防衛と見るならば、健全な自己愛と不健康な自己愛のバランスを見ることが必要であると考えられる。

また、これまで自己愛を測定する質問紙で最も広く使われているのは、Raskin & Hall (1979)の開発した自己愛人格目録(NPI)である。NPIは自己愛人格障害の診断基準をもとに、アメリカで作られたものである。しかし、NPIの全体得点が不適応性とは必ずしも相関しないことが報告されている(例えばEmmons, 1984; Watson et al. 1996)ため、NPIの項目には、健康的自己愛の側面も不健康な自己愛の側面も混ざっていると考えられる。また、自己愛の表れかたには大きく分けて2種類あることが確認されており(Broucek, 1991; Rosenfeld, 1987; Masterson, 1993; Gabbard, 1994など)、自己顕示的な「誇大型」と、対人恐怖的な「過敏型」の2種類が挙げられている。し

しかし、両者の行動的な現れ方は両極端であり、正反対の側面を持っている。そのため現在までに、これら2つの自己愛のタイプを測定する様々な試みがされている(Wink & Gough, 1990; Rathvon & Holmstrom, 1996 など)。日本でもこの2種類の自己愛のタイプを測定する試みがいくつか報告されているが(高橋、1998; 相澤、2002)、この2種類の自己愛のタイプを測定する質問紙の共通点として、誇大性と過敏性を別々の質問紙で測定しているところに問題があると考えられる。別々の特性として測るのであれば、「自己愛」でくくる意味がないのではないか、あるいは両者の共通点として「自己愛」はどこにあるのか、あいまいであることが問題である。そのため、自己愛の表現型の2面性を考慮に入れながらも、背後に「自己愛の問題」が共通していることを示す必要があるだろう。

NPIは、この2面性のうちでも、誇大・顕示型の臨床像に対応するような自己愛人格障害の診断基準をもとに作られているため(Raskin & Hall, 1979)、「誇大型」の自己愛を測定するには適しているであろう。しかし、自己愛の表れ方のもう一つの型である対人恐怖的な「過敏型」はこれと正反対の傾向をもっているため、NPIの総得点では測定する事はできない。しかし、両者の自己愛のタイプが「自己愛の問題」をともに抱えているとしたら、本来「誇大型」傾向を測定するNPIの項目の中に「過敏型」と共通するものがあるはずである。この共通するものが、「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中やこだわり」であるならば、このような特性を示す項目群がNPIの中にあり、なおかつそれは「過敏型」にも共通すると考えられる。

以上述べたように、自己愛の表れかたには大きく分けて「誇大型」と「過敏型」の2種類あるが、本研究ではその両者に共通する自己愛の問題に焦点をおき、「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中、こだわり」(他人の目にうつる自分を良く見せたり、あるいはこれ以上悪くならないように維持しようとする事)が両者に共通する自己愛の不適応的側面ではないか、ということを検討することを目的とした。「自己に対する関心の集中」とするのではなく、「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中」とすることで、自己愛の不適応的な側面を浮かび上がらせる事が出来るのではないかと思われる。また、その「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中やこだわり」は、対人関係とどのような関係にあるかを検討することを目的とする。そのため、自己愛の測定で最もよく使われているNPIを用いるが、NPIの下位尺度のうち、「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中やこだわり」を測定するような下位尺度が他の下位尺度とどのような関係にあるか、対人関係とどのような関係にあるかを検討していくことを目的とする。

2. 文章完成法による NPI の下位尺度における特徴の検討 (研究 1)²⁾

【目的】

これまで NPI の構造を検討するために因子分析を行った結果、「注目・賞賛願望」「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」の 4 因子が見出されている (中村、2000)。また、これまでの研究で、NPI と自己心理学における誇大自己を測定する「PA」と理想化を測定する「PGD」との関連を検討した結果、「注目・賞賛願望」のみが PA と PGD の両者と正の相関が認められたことが報告されている (中村・松並、2001)。PA は自己心理学における「誇大自己」の未熟性を測定するものであるが、Kohut & Wolf (1978) によると、この「誇大自己」の障害が、DSM-III (APA, 1980) に記述されるような「誇大型」の自己愛者に見られるとしている (Robbins, 1989)。また、PGD は自己心理学における「理想化」の未熟性を測定するものであるが、Masterson (1993) は、この理想化の障害が「過敏型 (Masterson の用語では、closet narcissism)」の自己愛の病理であることを指摘している。また、Kohut & Wolf (1978) によると、「理想化」の障害が、「過敏型」(ideal-hungry) に相当し、他者の反応に敏感で、ひきこもりがちな特徴を持つとしている (Robbins, 1989)。以上のように、NPI の下位尺度のうち「注目・賞賛願望」のみが PA と PGD の両方と相関が見られたことから、「誇大型」の自己愛と「過敏型」の自己愛の両者に共通した病理と関係が深いと考えられる。一方、「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」および NPI 総得点に関しては、PA とは有意な相関を示すものの、PGD とは有意な相関を示さなかった。本研究では、さらに自己愛の下位尺度別の特徴を、文章完成法 (SCT) を用いて検討することを目的とする。特に注目する点として、本研究のテーマである「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中、こだわり」に関する言及と NPI の下位尺度との関係を検討することを目的とする。

自己に関する記述と自己愛との関連を検討した例として、Exner (1973) は SCT を用い、自己愛と関係が深いと考えられる自己中心性 (Pulver, 1970) と自己記述の関連を検討した。その結果、記述の中で、自己に焦点をあてた反応 (S 反応) と、外界に焦点を当てた反応 (E 反応) に注目し、E 反応に比較して S 反応が多い群 (S/E 高群) が、自己中心性の高さの指標になることを報告している。しかし、例えば外界に焦点を当てていても、自分への評価の関心の高さゆえの場合もあるため、焦点付けが自己の内部か外部であるかのみ注目するのであれば、他者からの評価や他者の持つ自己像にアプローチすることはできないであろう。例えば、「私の生活を多くの人がうらやむ」という記述の場合、他者に焦点付けされていると言えるが、自分に関する事柄に関して他者から見られる視点が入っている。そのため、焦点付けが自己の内部か外部であるかのみ注

目するのではなく、他者から見た自分、あるいは他者を準拠枠とした自分に関する記述に注目することが必要であると考えられる。

また、自己愛の不適切性と他者からの評価に関しては、Horney (1939) は、人は誰しも自分自身の価値の決定に、ある程度他人の評価を頼りにしているが、不健康な自己愛の高い人は、他人の評価しかたよりにしていないと述べている。そのため、不適応的な自己愛と、他者からの評価を意識した記述とは関係があると考えられる。

そこで、本研究では、SCT を用い自分に焦点を当てるような記述を求め、そこで他者の評価を意識しているかどうかと、NPI との関係を検討することを目的とする。

【方法】

(A) 調査対象および調査時期

関西の大学生および大学院生 113 名(男性 56 名/女性 53 名)を対象に、2001 年から 2002 年にかけて質問紙調査を実施した。平均年齢は 20.00 歳 (SD=1.89) であった。

(B) 調査内容：質問紙調査

- (1) 自己愛の測定：Raskin & Hall (1979) により作成された尺度を大石 (1987) が邦訳した、自己愛人格目録 (NPI、54 項目 5 件法) を用いた。
- (2) 自分に関する記述 (SCT)：自分についての刺激文として「私の生活」「これまでの私」「私の悩んでいること」「私の中の本当の私」に対して回答を求めた。

【結果と考察】

中村 (2000) の NPI の下位尺度化に従い、「注目・賞賛願望」得点、「統率・指導性」得点、「自立・主張性」得点、「優越・有能感」得点をそれぞれ求め、さらに 4 つの下位尺度すべての合計得点を NPI の総得点とした。

次に、SCT の分析の方法として、自分についての刺激文に対して、他者との比較や、他者からの評価に関する記述など、他者を意識した記述をしたものに注目した。例えば、「私の生活」に関しては、「人と比べたら面白みに欠ける」、「世間並みに裕福」など、「これまでの私」では、「仮面をつけている」「人に好かれようと必死だった」など、「私の悩んでいること」では、「誰からも必要とされていない」「誰かに伝えたい」など、「私の中の本当の私」では、「周りの人のことばかり気にしている」「人に愛されたいと強く願っている」などの記述が一つでもあるものを、「他者意識群」とし、自己愛との関係を検討した。

その結果、他者意識群は非他者意識群に比較し、「注目・賞賛願望」平均得点が有意に高かった (Table 1)。一方、自己愛総得点および他の自己愛下位尺度得点では有意な差は認められなかった。

また、自己愛の各下位尺度および総得点で、平均値を基準にそれぞれ高群、低群とし、他者意識との関連を χ^2 検定により検討した。その結果、「統率・指導性」「自立・主張

Table 1: 自己愛と他者意識の関係

	全体	非他者意識群 (n=70)	他者意識群 (n=37)	t 値
総得点	119.78(18.81)	117.56(18.97)	123.24(18.47)	1.47
注目・賞賛願望	33.42(8.02)	31.7 (7.05)	< 36.14(8.76)	2.79**
統率・指導性	20.48(5.15)	20.46(5.36)	20.22(4.43)	.24
自立・主張性	36.41(5.99)	35.89(6.00)	37.16(6.01)	1.05
優越・有能感	29.60(6.42)	29.65(6.38)	29.73(6.85)	.07

*p<.05 **p<.01 ***p<.001 カッコ内は標準偏差

性)「優越・有能感」に関しては有意な差は見られず(それぞれ、 $\chi^2=.24$, $\chi^2=1.03$, $\chi^2=.21$, すべて n.s.)、総得点に関しては、有意傾向が見られるに過ぎなかった($\chi^2=2.81$, $p<.10$)。一方、「注目・賞賛願望」に関しては、有意な差が認められ($\chi^2=5.32$, $p<.05$)、「注目・賞賛願望」高群では SCT で他者を意識した記述をした者が多いのに対し、「注目・賞賛願望」低群では他者を意識してない記述をした者が多い傾向が認められた。以上の結果から、「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中、こだわり」がこの「注目・賞賛願望」に反映されることが裏付けられ、「注目・賞賛願望」が高いと、自分の評価に関して他者からの視点を準拠枠としていることが示された。

3. 自己愛と社会的スキル、孤独感との関連 (研究2)

【目的】

自己愛傾向と対人関係に関する研究は、臨床的にも実証的にもこれまでに多くなされてきている。たとえば Svrvakic (1989) は臨床的経験から、自己愛が強いと、相手に対し激しい理想化と脱価値、共感性や感謝の欠如、偽の愛他主義、他者に過剰に賞賛や特別扱いを要求するため、他者依存的、批判に対して非寛容で強い嫉妬や攻撃性、他人を利用・搾取、強い不信感、人間関係の深さの欠如といった対人関係における特徴が見られるとしている。

自己愛傾向と対人関係に関する実証的研究も積み重ねられてきており、その中でも小塩 (1998) は自己愛が友人関係の深さよりも広さの次元に関与することを見出しており、自己愛傾向が強いと友人が多いと自己報告する傾向があることを報告している。また自己報告のみならず、実際に自己愛傾向の強い人は他の人からも友人を多く持っていると思われる傾向があることが報告されている (小塩、1999)。友人を広く多く得るには、対人関係を円滑にするための技術である社会的スキルが必要であると考えられるが、そのため自己愛傾向と社会的スキルの間には関係があることが予想される。

一般に社会的スキルが高いと友人関係も多く、孤独感が少ないと予想される。実際孤独感が高いと、親密な関係を形成する技術が低いことが報告されている (相川ら、1993)。しかし、小塩 (1998) の研究にもあるように自己愛の高さと友人関係の広さとは関連

があっても、友人関係の深さの次元では関連が見られていない。このため、自己愛が高くても社会的スキルが高くても、孤独感が強いことが予想される。事実 Carroll et al. (1996) の研究では、自己愛傾向が強い人は、他者から関心を示されなかったり拒絶的な反応をうける傾向があることを報告している。また、Kernberg (1982) は、他者との交流から得られる内的な豊かさの蓄積がないため、自己愛者は孤独感が増していく傾向があると述べている。以上のことから、自己愛と孤独感には関連があることが推測される。自己愛と孤独感の関係を検討した実証的研究として、Joubert (1986) による研究があるが、NPI の総得点と孤独感尺度得点に、有意な相関が見られなかったことを報告している。しかし、この研究では自己愛を NPI の総得点でのみで測定していることに問題があると考えられる。そこで本研究では、自己愛の側面別に、社会的スキル、および孤独感との関係を検討することを目的とする。

【方法】

(A) 調査対象および調査時期

関西地区の大学生および大学院生 100 名 (男性 56 名/女性 44 名) を対象に、2000 年の 2 月から 3 月にかけて質問紙調査を実施した。平均年齢は 23.27 歳 (SD=2.51) であった。

(B) 調査内容：質問紙調査

- (1) 自己愛の測定：Raskin & Hall (1979) により作成された尺度を大石 (1987) が邦訳した、自己愛人格目録 (NPI、54 項目 5 件法) を用いた。
- (2) 社会的スキルの測定：菊地 (1988) により開発された KiSS-18 (18 項目 5 件法) を用いた。菊池 (1988) は、社会的スキルを「対人関係を円滑に運ぶために役立つスキル (技能)」と定義している。
- (3) 孤独感の測定：Russel, Peplau, & Cutrona (1980) により作成された尺度を工藤と西川 (1983) が邦訳した、UCLA 孤独感尺度 (20 項目 4 件法) を用いた。この尺度では、孤独感を願望レベルと達成レベルの間にギャップが生じた時に生ずる感情の一つとしている。そのため、孤独感は個人にとって苦痛で時には問題行動に駆り立てる感情であり、孤独感を解消することが円滑な人間関係を育むうえで重要であると視点からこの尺度は作られている。

【結果と考察】

(1) 自己愛と社会的スキル、孤独感の関係

研究 1 と同様に、「注目・賞賛願望」得点、「統率・指導性」得点、「自立・主張性」得点、「優越・有能感」得点、および NPI の総得点を求めた。社会的スキル尺度 (KiSS-18) および UCLA 孤独感尺度はともに 1 因子構造を持つ尺度と考えられるので (菊池、1988；工藤と西川、1983)、それぞれの全項目の合計得点を、それぞれ社会的スキル得

点、孤独感得点とした。

NPI と社会的スキル、および孤独感との関連を Table 2 に示す。NPI の総得点および各下位尺度と社会的スキルの関連を検討したところ、社会的スキルと総得点、「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」には、それぞれ正の有意な相関が認められたのに対して、「注目・賞賛願望」とは有意な相関が見られなかった。このことは、NPI の総得点や「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」の得点が高いと社会的スキルが高いことを意味しており、小塩 (1999) が示したように、自己愛傾向が高いと交友関係が広いという結果と一致するものとなった。しかし、下位尺度別で検討すると、「注目・賞賛願望」のみが、他の下位尺度と異なり、有意な相関関係が認められなかったことから、「注目・賞賛願望」が他の下位尺度と異なり独自の性質を持つことが示された。また NPI と孤独感の関連を検討したところ、「統率・指導性」および「優越・有能感」で、負の有意な相関が認められたが、総得点、「注目・賞賛願望」、および「自立・主張性」では、有意な相関が認められなかった。

次に、NPI の下位尺度間に相関関係があることを考慮し、それぞれの下位尺度と社会的スキル得点、および孤独感得点との偏相関係数を算出した。なお、相関のパターンを考慮して、Gramzow & Tangney (1992) や Watson & Biderman (1993) に従い、「注目・賞賛願望」の偏相関係数は、「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」を統制し、他の3つの下位尺度では「注目・賞賛願望」を統制して、偏相関係数を求めた。その結果、「注目・賞賛願望」のみが他の下位尺度とは異なる傾向を示し、他の下位尺度では社会的スキルと正の相関が見られるのに対し、「注目・賞賛願望」とは負の相関が見られた。このことから、他の下位尺度との関係を統制すると「注目・賞賛願望」の得点が高いことが、社会的スキルの低さにつながることを示された。本研究で使用された社会的スキル尺度 (KiSS-18) は対人的適応の指標と正の関連、不適応の指標と負の関連があることが示されており (菊池、1988)、「注目・賞賛願望」が自己愛の中でも不適応的な要素であることが示された。一方、「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」では、中程度の正の相関が示されており、より適応的な自己愛であると考えられた。また、NPI と孤独感との偏相関係数を求めた結果、「統率・指導性」および「優越・有能感」では有意な負の相関が見られたのに対し、「注目・賞賛願望」とは正の相関が認められた。以上の結果から、自己愛の中でも、人からほめられたり、注目をあびたいという欲求をあらゆる側面である「注目・賞賛願望」が高い人は、自分がどう見られているかに意識が行き過ぎ、対人関係を円滑にする技術をうまく使えず、孤独感が増すことにつながっていると考えられる。今回の調査で使用した孤独感の尺度は、孤独感を個人にとって苦痛で時には問題行動に駆り立てるような感情と捉え、不適応的なものとみなしていることから、「注目・賞賛願望」が不適応的な性質を表すことが示唆された。

Table 2 : NPI と社会的スキルおよび孤独感の相関

	社会的スキル	孤独感
注目・賞賛願望	-.07	.06
統率・指導性	.37***	-.20*
自立・主張性	.48***	-.07
優越・有能感	.50***	-.33**
総得点	.39***	-.16

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

Table 3 : NPI と社会的スキルおよび孤独感の偏相関

	社会的スキル	孤独感
注目・賞賛願望	-.43***	.21*
統率・指導性	.41***	-.23*
自立・主張性	.53***	-.09
優越・有能感	.52***	-.38***

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

(2) 自己愛のタイプ別社会的スキルおよび孤独感との関係

NPI の下位尺度のうち「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」は似た性質を示すため合計得点を算出し、「肯定的自己愛」得点とした。一方「注目・賞賛願望」は他の下位尺度とは異なる性質を持つため、「注目・賞賛願望」得点と「肯定的自己愛」得点のバランスから被験者を3群に分類した。「肯定的自己愛」標準化得点 (Z 得点) から「注目・賞賛願望」標準化得点 (Z 得点) を引き、その値を基準に3群に分けた。「肯定的自己愛得点」から「注目・賞賛願望」の得点を引いた値が標準偏差を基準に小さい群を、注目賞賛優位群、中間を中間群、高い群を肯定的自己愛優位群とした (Figure 1)。

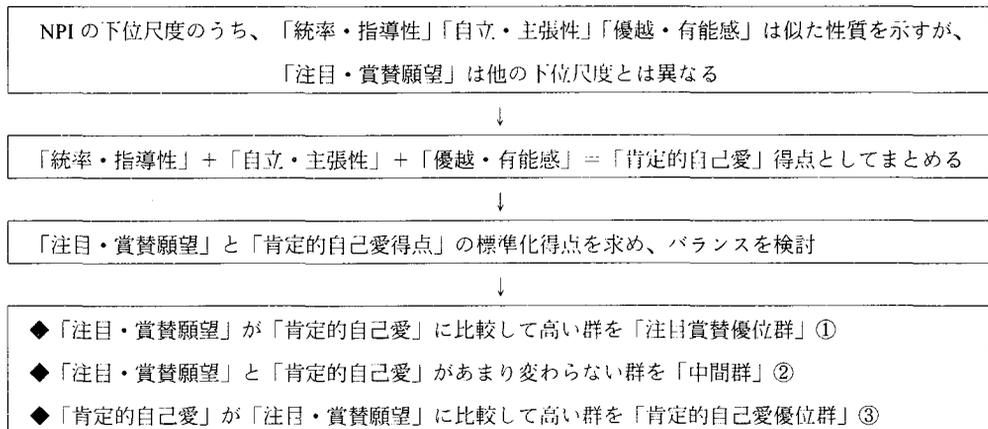


Figure 1 : 自己愛のタイプ分け

この3群で社会的スキル、および孤独感との関係を分散分析により検討した。その結果、社会的スキルでは、注目賞賛願望優位タイプで最も得点が低く、肯定的自己愛優位群が最も高かった (Table 4、Figure 2)。また孤独感においては、注目賞賛優位群が他の群に比較して最も得点が高かった。以上の結果から、対人関係における自己愛の不応性を考えるうえで、「注目・賞賛願望」の得点のみならず、他の自己愛下位尺度とのバランスを考慮することが必要であることが示唆された。特に、「注目・賞賛願望」が高くそれに比較して肯定的自己愛の得点が低いと、社会的スキルが低く孤独感が高いことから、最も不適応度が強いと言えるだろう。一方、「注目・賞賛願望」が低く肯定的自己愛が高い群は社会的スキルが最も高く孤独感も低いことから、この群が最も適応的であることが考えられる。

Table 4: 自己愛のタイプ別社会的スキル、および孤独感得点

	注目賞賛優位群 (n=13)	中間群 (n=70)	肯定的自己愛優位群 (n=12)	F 値 (d.f.=2,92)	多重比較 (LSD 法)
社会的スキル	50.15(4.86)	59.60(8.81)	68.17(8.71)	14.47***	注<中<肯
孤独感	44.85(11.77)	36.87(8.26)	34.50(10.93)	5.00**	注>中・肯

* $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$ カッコ内は標準偏差

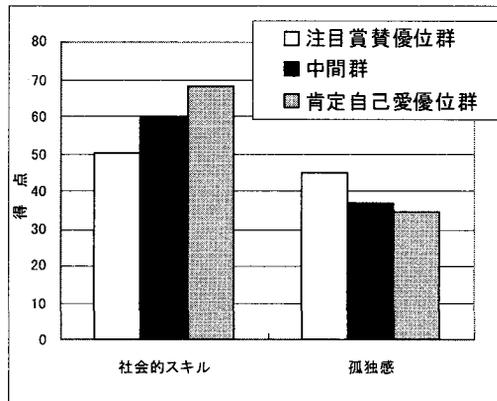


Figure 2: 自己愛のタイプ別社会的スキル、および孤独感得点

4. 自己愛と対人恐怖心性との関連 (研究3)

【目的】

自己愛者には大きく分けて「誇大型」と「過敏型」2つのタイプがあることが、これまで指摘されてきている (Broucek, 1991; Rosenfeld, 1987; Masterson, 1993; Gabbard, 1994 など)。その中でも特に、「過敏型」は対人恐怖心性と親近性があること

が報告されている（岡野、1998）。対人恐怖は、一般に「他者と同席する場面で、不当に強い不安と精神的緊張が生じ、そのため他人に軽蔑されるのではないか、他人に不快な感じを与えるのではないか、嫌がられているのではないかと案じ、対人関係からできるだけ身を退こうとする神経症の一種」と定義される（笠原、1993）。例えば、「過敏型」の自己愛者の例として Akhtar & Thomson（1982）は、他者に対する過敏性や劣等感をしめす自己愛者の存在を指摘し、また Gabbard（1994）は、「周囲を過剰に気にかける自己愛者（hypervigilant）」とよび、内気で他者を回避する傾向を示すことを指摘しているが、このような傾向は対人恐怖の特徴と共通する部分が多い。

一方、NPI は、もともと DSM-III（APA, 1980）で記述されるような「誇大型」の自己愛傾向を測定するための尺度である（Raskin & Hall, 1979）。しかし「誇大型」と「過敏型」のどちらも自己愛の問題とされるのは、両者に共通した問題があるはずである。その両方に共通する側面として、これまで「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中、こだわり」であることが示唆されたが、それが NPI の下位尺度である「注目・賞賛願望」により測定できることが示された（研究 1）。そこで、本研究では、自己愛の中でも特に「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中、こだわり」に焦点をあて、対人恐怖心性との関連を検討することを目的とする。

【方法】

(A) 調査対象および調査時期

関東地区の大学生 275 名(男性 210 名/女性 59 名)を対象に、2003 年に質問紙調査を実施した。平均年齢 19.02 歳 (SD=1.19) であった。

(B) 調査内容：質問紙調査

- (1) 自己愛の測定：Raskin & Hall（1979）により作成された尺度を大石（1987）が邦訳した、自己愛人格目録（NPI、54 項目 5 件法）を用いた。
- (2) 対人恐怖傾向の測定：堀井・小川（1996; 1997）が作成した対人恐怖心性尺度（30 項目、5 件法）を用いた。この尺度は、「自分や他人が気になる悩み」「集団に溶け込めない悩み」「社会的場面で当惑する悩み」「目が気になる悩み」「自分を統制できない悩み」「生きることに疲れている悩み」の計 6 つの下位尺度からなる。なお、すべての下位尺度は 5 つの項目からなる。

【結果と考察】

(1) 自己愛と対人恐怖心性の関係

自己愛と対人恐怖心性との関係を検討するために、自己愛のそれぞれの下位尺度得点と対人恐怖心性得点の相関を検討した。その結果、NPI の総得点および「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」と、対人恐怖心性のすべての下位尺度との間において、有意な負の相関が見られた。一方、「注目・賞賛願望」のみは、NPI の他の下位尺度と

異なる傾向を示し、「自分や他人が気になる」とは弱い有意な正の相関が認められたが、他の対人恐怖心性尺度の下位尺度とはほとんど相関が見られなかった。これらの結果から、「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」は対人関係における適応性と関連するという、これまでの研究の結果と一致するものであった。一方、「注目・賞賛願望」が高いと他人が自分をどう見ているのか気にする傾向が強いことが示された。

次に、NPI の下位尺度間に相関関係があることを考慮し、研究 2 と同様の方法で、それぞれの下位尺度と対人恐怖心性との偏相関係数を算出した。その結果、「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」と対人恐怖心性の全ての下位尺度との間において、有意な負の相関が見られた。一方「注目・賞賛願望」と、対人恐怖心性の「目が気になる」以外のすべての下位尺度との間には、正の相関が認められた。特に「自分や他人が気になる」「自分を統制できない」において高い偏相関係数が算出された。以上の結果から、NPI の中でも、「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」は対人関係における適応性と関連するのに対し、「注目・賞賛願望」は対人関係における対人恐怖的な不適応性に関連することが示唆された。

Table 5 : NPI と対人恐怖心性の相関

	自分や他人 が気になる	集団に溶け 込めない	社会的場面 で当惑する	目が気にな る	自分を統制 できない	生きること に疲れ
注目・賞賛	.21**	-.09	-.12*	-.18**	.06	-.00
統率・指導	-.18**	-.46***	-.50***	-.44***	-.31***	-.25***
自立・主張	-.28***	-.34***	-.46***	-.43***	-.41***	-.32***
優越・有能	-.33***	-.44***	-.45***	-.44***	-.45***	-.45***
総 得 点	-.17**	-.43***	-.48***	-.46***	-.35***	-.32***

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

Table 6 : NPI と対人恐怖心性の偏相関

	自分や他人 が気になる	集団に溶け 込めない	社会的場面 で当惑する	目が気にな る	自分を統制 できない	生きること に疲れ
注目・賞賛	.40	.17**	.20**	.09	.30***	.16**
統率・指導	-.33***	-.49***	-.50***	-.41***	-.41***	-.31***
自立・主張	-.42***	-.36***	-.46***	-.40***	-.49***	-.39***
優越・有能	-.41***	-.45***	-.44***	-.41***	-.51***	-.51***

*p<.05 **p<.01 ***p<.001

(2) 自己愛のタイプ別対人恐怖心性との関係

研究 2 と同様、被験者を「肯定的自己愛」得点（「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」の合計得点）と「注目・賞賛願望」得点のバランスを基準に 3 群に分け、対人恐怖心性との関係を分散分析により検討した。その結果、対人恐怖心性のすべ

ての下位尺度において①の注目賞賛優位群が最も得点が高く、そのためこの群が「過敏型」に相当することが示唆された (Table 7、Figure 3)。一方③の肯定的自己愛優位群は対人恐怖心性が最も低く、これまでこの群は対人関係における適応性が最も高いことが示されてきたが、今回もそれを裏付ける結果となった。

Table 7: 自己愛のタイプ別対人恐怖心性得点

	注目賞賛優位群 (n=36)	中間群 (n=176)	肯定的自己愛優位群 (n=45)	F 値 (d.f.=2,249)	多重比較 (LSD 法)
自分・他人が気になる	19.61(3.77)	17.08(3.94)	13.02(4.21)	29.00***	注>中>肯
集団に溶け込めない	18.89(5.30)	14.48(4.69)	12.25(4.42)	20.15***	注>中>肯
社会的場面で当惑	19.56(5.41)	15.71(4.69)	12.80(5.24)	18.93***	注>中>肯
目が気になる	15.67(5.60)	13.21(4.71)	11.27(4.89)	8.05***	注>中>肯
自分を統制できない	17.97(4.21)	13.93(3.64)	11.23(3.31)	33.64***	注>中>肯
生きる事に疲れ	16.25(4.47)	13.28(4.17)	10.86(3.47)	17.05***	注>中>肯

*** $p < .001$ カッコ内は標準偏差

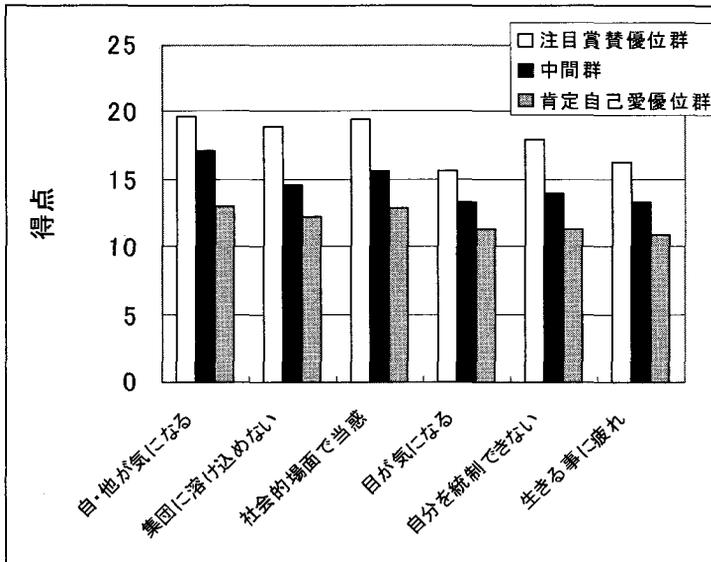


Figure 3: 自己愛のタイプ別対人恐怖心性得点

5. 総合的考察

まず、研究1ではSCTを用いて、自分について記述を求めたのに対し、他者の基準から自分はどうか、あるいは他者に映る自分はどうか、を意識した群を他者意識群と名付けたが、他者意識群ではNPIの下位尺度のうち「注目・賞賛願望」得点が高いという結果が得られた。さらに、「注目・賞賛願望」が高い群は、低い群に

比較して他者を意識した記述をする者が有意に多かったことから、「他者が持つ自分に関する評価への関心」がこの「注目・賞賛願望」に反映されることが裏付けられ、「注目・賞賛願望」が高いと、自分の評価に関して他者からの視点を準拠枠としていることが示された。しかし、他者意識群と言っても、ここで他者の評価に関心が向くが、他者自身に関心が向くこととは異なることに注意しなければならない。SCTでの記述で「人と比べたら」や「人に好かれよう」など、あくまで他者を独自の人間と見るよりも、むしろ自分を見るためのフィルターとしての他者という視点が重要であるといえるだろう。

これまでの研究でNPIの下位尺度の中で「注目・賞賛願望」のみが誇大型に関係するPAと過敏型に関係するPGDの両方と相関が見られた(中村・松並、2001)ことから、「誇大型」の自己愛と「過敏型」の自己愛の両者に共通した病理と関係が深いと考えられる。本研究におけるSCTの分析の結果から、この「注目・賞賛願望」が「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中、こだわり」を反映していると考えられるため、「誇大型」の自己愛と「過敏型」の自己愛の両者に共通する自己愛の病理の本質が、「他者が持つ自分に関する評価への関心」であるという仮説を支持するものとなった。このように、「注目・賞賛願望」が「誇大性」と「過敏性」の両者と関係すること、および本研究におけるテーマである「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中、こだわり」を測定するのに最も適していると考えられた。

そのため、研究2・3では自己愛のうち、「注目・賞賛願望」に焦点をあて、対人関係における特徴を検討した。研究2では、自己愛と社会的スキル、および孤独感との関連を検討した。その結果、自己愛の中でも「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」が高いと、社会的スキルも高い傾向が見られたことに対し、「注目・賞賛願望」と社会的スキルには相関が認められず、「統率・指導性」「自立・主張性」「優越・有能感」を統制すると、負の偏相関係数が得られたことから、「注目・賞賛願望」が高い人は、他者から自分がどのように見られるかを意識しすぎるあまり、対人関係において積極的に話しかけたり自己主張することがうまくできない傾向が見られることが示唆された。実際、自己愛と関係が深いと考えられる自己没入(自分のことを意識する度合い)が高いことが適切な自己開示ができず、うまく対人関係を結べないことと関係していることが報告されている(森脇、2002)。また、孤独感と「注目・賞賛願望」の間には正の偏相関が見られたことから、「注目・賞賛願望」が高いと孤独感の高さにつながっていることが示された。今回使用した孤独感を測定する尺度では、孤独感を苦痛で時には問題行動に駆り立てる感情、という側面から捉えられているため、このような孤独感が強いことが、不適応的であることを示唆する。そのため、「注目・賞賛願望」が高いと社会的スキルが低く、このような孤独感が高いことから、対人関係における不適応的側面を表していることが示唆され、Kernberg(1982)が述べたように自己愛者は他者との交流から得られる内的な豊かさが得られないため、孤独感が高くなる、という報告を

裏づけるものであった。

また、「注目・賞賛願望」が他の下位尺度とは異なる傾向を示すことから、NPIの「注目・賞賛願望」と他の下位尺度のバランスから、3つの群に分類して検討を行った。なお、小塩（2002）はNPIから3つの下位尺度（「注目・賞賛欲求」「優越感・有能感」「自己主張性」）を見出し、自己愛傾向全体得点の高低による軸と、「注目・賞賛欲求」と「自己主張性」のどちらが優位かの軸から4群に分類しているが、本研究では「注目・賞賛願望」に焦点をあて、他の下位尺度とのバランスを考慮して分類を行った。その結果、①の注目賞賛願望優位群は他の群に比較して、社会的スキルが低く、孤独感が高い傾向が見られた。このことから①の群が対人関係で最も不適応的な群であることが予想された。一方③の肯定的自己愛優位群は最も社会的スキルが高く、孤独感も低い傾向が見られたことから、最も適応的な群であることが確認された。そのため、①の注目賞賛願望優位タイプが対人関係における不適応的な側面が強く、社会的スキルの低さ、孤独感の強さから、「過敏型」のタイプに近いことが予想された。さらに、①の注目賞賛願望優位タイプが「過敏型」に相当するか、より詳細に検討する必要性が示された。

そこで、研究3では自己愛と対人恐怖心性との関連を検討した。その結果、「注目・賞賛願望」と対人恐怖心性との相関は、それほど大きなものではなかった。これは、自己愛の他の下位尺度との関係があるためだと考えられる。「注目・賞賛願望」が高くて、その他の下位尺度も高いと、対人恐怖心性が打ち消されると考えられる。実際、偏相関係数を求めると「注目・賞賛願望」と対人恐怖心性の多くの下位尺度と相関が見られ、また、自己愛のタイプ別検討でも、①の注目賞賛願望優位タイプは②の中間群に比較して対人恐怖心性が高いことが示されている。そのため、NPIの下位尺度の中でも「注目・賞賛願望」単独では対人恐怖心性と関連するのに対し、他の下位尺度では対人恐怖心性とは負の相関を示すことから、「注目・賞賛願望」が対人関係における不適応性と関連することが示された。対人恐怖心性の中でも、特に「自分や他人が気になる」「自分を統制できない」の下位尺度で、「注目・賞賛願望」と関連が強かった。「自分や他人が気になる」は、「自分が人にどう見られているのかクヨクヨ考えてしまう」「他人が自分をどのように思っているのかとても不安になる」などの項目からなるため、「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中」が「注目・賞賛願望」に反映されていることを支持する結果であった。

自己愛のタイプ別にその特徴を検討したところ、①の注目賞賛優位群は最も対人恐怖心性が高いことから、過敏型の自己愛者に最も近いタイプであることが裏付けられた。一方③の肯定的自己愛優位群は対人恐怖心性が低いことから、最も適応性が高いタイプであることが示唆された。

以上の結果から、「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中、こだわり」が、NPIの下位尺度の中でも「誇大型」と「過敏型」に共通すると考えられる「注目・賞賛願望」で捉えることができることが示された。この「注目賞賛願望」が対人関係において不適

応的な側面をあらわしていることが示唆された。また、自己愛のタイプ別検討から、①の注目賞賛願望優位タイプが対人関係における不適応的な側面が強く、社会的スキルの低さ、孤独感の強さ、および対人恐怖心性の高さから、「過敏型」のタイプに相当することが予想された。また、対照的に③の肯定的自己愛優位タイプが適応的な側面が強いことが示唆された。

「自己愛」は自己のインフレーション (Horney, 1939)、あるいは自己イメージの拡大 (Millon, 1981) などの定義に見られるように、「自分に対する誇大感」を自己愛の本質と見る研究者もいる。しかし、人は誰しもある程度は「自分は特別」という思いを持っており、それが必ずしも不適応にはつながらないのではないだろうか。事実、自分自身や物事に対して実際よりもよく見る傾向 (positive illusion) と心理的健康には、正の相関が報告されている (外山・桜井、2000)。また、自分自身の現実を多くの人はポジティブにゆがめて認知するが、ゆがめることなく客観的に見つめることができる人は、抑うつ傾向が強いことも報告されている (Taylor & Brown, 1988)。自己愛と positive illusion や自己の過大評価に関しての実証的研究として、John & Robbins (1994) は、集団討論の課題において、NPI の総得点が高い群 (NPI 高群) は自分を過大評価し、NPI 低群は自分を過小評価する傾向があるが、NPI 中群が高群と低群に比較して自己認識が正確であったことを報告している。Gabriel, et al. (1994) は、自尊感情よりも自己愛が positive illusion と関連し、NPI の総得点が高いと、自分の知的能力に関してより positive な illusion を持ち、過大評価する傾向を報告している。このように、自己の過大視と自己愛とは関連が深いと考えられるが、いずれの研究も NPI の総得点にしか注目していない。しかし、このような自己の過大視は、NPI の下位尺度の項目内容を考慮すると、他者との比較で自分の有能性の認知に関係する「優越・有能感」に最も反映されていると思われるが、この下位尺度が高いことは適応的であることが今回の研究では繰り返し示された。このように、自分の中で自分に関する誇大感を持つこと自体は、多くの人に共通する心理であり、それ自体を不適応的なものとは必ずしも捉えられないと考えられる。「優越・有能感」と適応性との関連が見られた理由として、「優越・有能感」が高いと、それだけ自己の過大視や positive illusion が強いいため、質問紙の回答に際しても適応的な方向に回答が歪む可能性も考えられる。しかし、「優越・有能感」が高いと周囲の人からも多くの友達を持っていると認知されたり (小塩、1999)、「優越・有能感」と社会的望ましさが相関を示さないこと (Watson, et.al, 1984; 小塩、1997) から、このような自分に関する過大視や positive illusion により回答に歪みが生じ、その結果として適応性との関連が見られたとは考えにくい。

今回の調査で繰り返し示されたのは、不適応性に関連するのは「注目・賞賛願望」の高さであった。以上のことから、自分に対する誇大感を持つことそれ自体が問題なのではなく、むしろその誇大感を他者に対しても要求することが、不適応性を生じるのではないかと考えられる。Kohut (1971) も、他者に対して誇大自己を鏡映してもらうことを

飽くことなく要求することを、自己愛の病理の一つとしている。つまり、他者から自分の誇大性を映し返してもらえないと、自己評価を維持できないことに問題が生じると考えられる。他者からの評価で自己評価が変動するため、安定した自己評価を得られず、そのためさらに他者から高い評価を得ることにこだわることを繰り返すため、自己概念や対人関係における不適応につながると考えられる。そのため、自己愛の問題は、自己の拡大そのものよりも、拡大した自己イメージを他者に要求すること、つまり「他者が持つ自分に関する評価への関心の集中、こだわり」が本質的であり、それが今回の調査で示されたように社会的スキルの低さや孤独感の強さなど、さまざまな不適応を生み出すと考えられる。町沢（1998）は、極端に誇大性が高いが、他者がそれを認めてくれるかについては気にしない状態は「躁状態」であり、自己愛状態とは明らかに違うと述べている。そのため、自己愛の定義にある「自分に対する関心の集中」を、「本当の自分自身に対する関心」と「他者から見られる（評価される）自分に対する関心」の二つの側面に分けることが自己愛の健康性を考えるうえで重要であるといえるだろう。しかし、どのような評価を他者から得たいかは、人によって異なることが考えられる。自己の側面にもさまざまな側面があるため、どの側面に対して他者から認められることに関して重点をおくかによって、自己愛の質も変わってくる可能性が考えられる。そのような他者から評価されたい側面を考慮に入れ、今後より詳細に検討していく必要があるだろう。

注

- 1) 本論文は、大阪大学に提出した博士論文の一部を加筆・修正したものである。
- 2) 大阪大学大学院言語文化研究科の松並知子さんとの共同研究の一環で行われた。

参考文献

- 相川充・佐藤正二・佐藤容子・高山巖 1993 孤独感の高い大学生の対人行動に関する研究：孤独感と社会的スキルとの関係 社会心理学研究、8、44-55.
- 相澤直樹 2002 自己愛的人格における誇大特性と過敏特性 教育心理学研究、50、215-224.
- Akhtar, S., & Thomson, J.A. 1982 Overview: Narcissistic personality disorder. *American Journal of Psychiatry*, 139, 12-20.
- American Psychiatric Association 1980 *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders Third Edition (DSM-III)*. Washington, DC.
- Broucek, F. 1982 Shame and its relationship to early narcissistic developments. *International Journal of Psychoanalysis*, 63, 369-378.
- Carroll, L., Hoenigmann-Stovall, N., & Whitehead, G.I. 1996 Interpersonal consequences of narcissism. *Psychological Reports*, 79, 1267-1272.
- Emmons, R.A. 1984 Factor analysis and construct validity of the narcissistic personality inven

- tory. *Journal of Personality Assessment*, **48**, 291-300.
- Exner, J.E. 1973 The self focus sentence completion: a study of egocentricity. *Journal of Personality Assessment*, **37**, 437-455.
- Freud, S. 1914 On narcissism: an introduction. in *Complete Psychological Works*, standard ed, vol. 14, London, Hogarth Press, 1949 (懸田・高橋他訳 1969 ナルシズム入門(フロイト著作集第5巻) 人文書院)
- Gabbard, G.O. 1994 Psychodynamic psychiatry in clinical practice: The DSM-IV edition. Washington, D.C. American Psychiatric Press. (館哲朗監訳 1997 精神力動的精神医学 ③臨床編: II軸障害 岩崎学術出版)
- Gabriel, M. T., Critelli, J. W., & Ee, J. S. 1994 Narcissistic illusions in self-evaluations of intelligence and attractiveness. *Journal of Personality*, **62**, 143-155.
- Gramzow, R., & Tangney, J.P. 1992 Proneness to shame and the narcissistic personality. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **18**, 369-376.
- Hartmann, H. 1964 *Essays on Ego Psychology*. New York, International Universities Press, Inc.
- 堀井敏章・小川捷行 1996 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報、**20**、55-65.
- 堀井敏章・小川捷行 1997 対人恐怖心性尺度の作成(続報) 上智大学心理学年報、**21**、43-51.
- Horney, K. 1939 *New ways in psychoanalysis*. New York, W.W.Norton & Company Inc. (安田一郎訳 1972 ホーナイ全集第3巻 精神分析の新しい道 誠信書房)
- John, O.P., & Robins, R.W. 1994 Accuracy and bias in self-perception: Individual differences in self-enhancement and the role of narcissism. *Journal of personality and social psychology*, **66**, 206-219.
- Joubert, C.E. 1986 Social interest, loneliness, and narcissism. *Psychological Reports*, **58**, 870.
- Kernberg, O.F. 1982 Narcissism. In Gilman, S. L. (ed) *Introducing Psychoanalytic theory*. Brunner / Mazel (小此木啓吾訳 1984 自己愛 岩波講座精神の科学、別巻 岩波書店 279-315)
- 菊池章夫 1988 思いやりを科学する 川島書店
- Kohut, H. 1971 *The Analysis of the Self*. New York, International Universities Press. (水野信義・笠原嘉監訳 1994 自己の分析 みすず書房)
- Kohut, H. & Wolf, E. 1978 The disorders of the self and their treatment: An outline. *International Journal of Psychoanalysis*, **59**, 413-425.
- 工藤力・西川正之 1983 孤独感に関する研究(1) -孤独感尺度の信頼性・妥当性- 実験社会心理学研究、**22**、99-108.
- 町沢静夫 1998 現代人の心にひそむ「自己中心性」の病理 双葉社
- Masterson, J. F. 1993 *The Emerging Self: A Developmental, Self, and Object Relations Approach to the Treatment of the Closet Narcissistic Disorder of the Self*, Taylor & Francis.
- Millon, T. 1981 Disorders of personality *DSM-III: Axis II*. New York: Basic Books.
- Moore, B.E. and Fine, D.(eds) 1967 *A Glossary of Psychoanalytic Terms and concepts*. New York, American Psychoanalytic Association, (福島章監訳 1995 精神分析事典 新曜社)
- 森脇愛子・坂本真士・丹野義彦 2002 大学生における自己開示方法および被開示者の反応の尺度作成の試み 性格心理学研究、**11**、12-23.

- 中村晃 2000 「自己愛と対人関係」 自己心理学研究、**1**、73-83.
- 中村晃 2004 「健全な自己愛と不健全な自己愛」 千葉商大紀要、**42** (1)、1-20.
- 中村晃・松並知子 2001 自己愛の適応・不適応と性役割の検討 大阪大学教育学年報、**6**、255-266.
- 岡野憲一郎 1998 恥と自己愛の精神分析 岩崎学術出版社
- 小此木啓吾 1992 自己愛人間 ちくま学芸文庫
- 大石史博・福田美由紀・篠置昭男 1987 自己愛的人格の基礎的研究(1) -自己愛的人格目録の信頼性と妥当性について- 日本教育心理学会 29 回発表論文集、534-535.
- 小塩真司 1997 自己愛傾向に関する基礎的研究-自尊感情、社会的望ましさととの関連 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学科)、**44**、155-163.
- 小塩真司 1998 青年の自己愛傾向と自尊感情、友人関係のあり方との関連 日本教育心理学研究、**46**、280-290.
- 小塩真司 1999 高校生における自己愛傾向と友人関係のあり方との関連 性格心理学研究、**8**、1-11.
- 小塩真司 2002 自己愛傾向によって青年を分類する試み 日本教育心理学研究、**50**、261-270.
- Pulver, S. 1970 Narcissism: The term and the concept. *Journal of the American Psychoanalytic Association*, **18**, 319-341.
- Raskin, R., & Hall, C.S. 1979 A narcissistic personality inventory. *Psychological Reports*, **45**, 590.
- Rathvon, N., & Holmstrom, R.W. 1996 An MMPI-2 portrait of narcissism. *Journal of Personality Assessment*, **66**, 1-19.
- Robbins, S.B. 1989 Validity of the superiority and goal instability scales as measures of defects in the self. *Journal of Personality Assessment*, **53**, 122-132.
- Rosenfeld, H. 1987 *Impasse and Interpretation*. London, Tavistock Publications.
- Russel, D. Peplau, L.A. & Cutrona, C.E. 1980 The revised UCLA Loneliness Scale: Concurrent and discriminant validity evidence. *Journal of Personality and Social Psychology*, **39**, 472-480.
- Stolorow, R.D. 1975 Toward a functional definition of narcissism. *International Journal of Psycho-Analysis*, **56**, 179-185.
- Svrakic, D.M. 1989 Narcissistic interpersonal relations: clinical approach. *European Journal of Psychiatry*, **3**, 25-32.
- 高橋智子 1998 青年のナルシズムに関する研究 -ナルシズムの2つの側面を測定する尺度の作成- 日本教育心理学会第40回総会発表論文集、147.
- Taylor, S. E., & Brown, J. 1988 Illusion and well-being: A social psychological perspective on mental health. *Psychological Bulletin*, **103**, 193-210.
- 外山美樹・桜井茂男 2000 自己認知と精神的健康の関係 教育心理学研究、**48**、454-461.
- Watson, P. J., & Biderman, M. D. 1993 Narcissistic Personality Inventory factors, splitting, and self-consciousness. *Journal of Personality Assessment*, **61**, 41-57.
- Watson, P.J., Grisham, S.O., Trotter, M.V., & Biderman, M.O. 1984 Narcissism and empathy: Validity evidence for the narcissistic personality inventory. *Journal of Personality*

Assessment, **48**, 301-305.

Watson, P. J., Hickman, S. E., & Morris, R. J. 1996 Self-reported narcissism and shame: Testing the defensive self-esteem and continuum hypotheses. *Personality and Individual Differences*, **21**, 253-259.

Wink, P., & Gough, H. G. 1990 New narcissism scales for the California Psychological Inventory and MMPI. *Journal of Personality Assessment*, **54**, 446-462.

Maladaptive narcissism and interpersonal relations

Akira NAKAMURA

What is the essential factor of maladaptive narcissism? I hypothesized that "concentration on the evaluation from others" would be the main aspect of maladaptive narcissism, and examined the influence of "concentration on the evaluation from others" on one's interpersonal relations.

First, the characteristics of four subscales of Narcissistic Personality Inventory (NPI) were analyzed by using the Sentence Completion Test. Next, the relationships between subscales of NPI and the scales for measuring interpersonal relationships were examined.

The results suggested that "concentration on the evaluation from others" should be estimated from "Desire for Attention and Admiration (AA)", which was one of the subscales of NPI. In addition, AA correlated with the maladaptability of interpersonal relations. The participants were classified into three types by the balance of NPI subscales, and the most maladaptive group was the type in which AA was predominant. Moreover, because this type showed high tendency of social phobia, this type corresponded to the hypersensitive type.